

14 世紀におけるモンゴル帝国の食文化の高麗への流入と変化

趙 阮(漢陽大学)

発表要旨

13 世紀のモンゴル帝国建国以来、大規模な移動が起こり、その後、各地域で文化交流が行われた。文化的な接触や刺激、変化は、モンゴル帝国時代の物質文化の領域の中でも、食文化に大きく反映されている。13 世紀、モンゴルがユーラシア大陸を征服後、各地域でモンゴルの皇帝に食事をもてなし、14 世紀には帝国の中心部で食文化の多様化や融合が見られた。食文化の変化は、帝国の中心部から次第に周辺地域にも広まった。1260 年モンゴルと高麗の和親締結後、高麗に仏教で禁止されていた肉食文化が流入した。

朝鮮時代は、仏教の衰退とともに茶に代わる飲み物が発達した。14 世紀『飲膳正要』に紹介されていた清涼飲料水の舎兒別の調理に関する知識が、17～18 世紀朝鮮後期の日常生活書である『山林經濟』と農書『林園經濟志』に渴水として紹介されている。本発表では、モンゴル帝国の食文化の多様化と高麗地域への流入の過程を検討し、朝鮮半島で起こったモンゴルの食文化流入の跡を辿りながら、13 世紀のモンゴル帝国が拡大する中で現れたモンゴル帝国のグローバル現象の特徴とその意味を見ていく。

略歴

漢陽大学史学科(学部)を卒業し、中国の中央民族大学で 16 世紀モンゴル研究で修士学位を取得した。以後、北京大学歴史学科に進学し、「蒙元帝国期におけるダルガチ制度の研究」で博士学位を取る。ソウル大学歴史研究所では、「17-20 世紀蒙元史研究に表れる清の知識人のモンゴル帝国認識」というテーマで博士後研究課程(Postdoc)の研究を進めたこともある。漢陽大学比較歴史文化研究所の HK 研究教授を歴任。現在、漢陽大学や世宗大学で講義している。専攻分野は蒙元史。モンゴル帝国期の統治制度や周辺地域との文化交流、清代の史書に反映されたモンゴル帝国に関する認識などについて研究中である。

主な論文としては、「大元帝国のダルガチ体制と地方統治-ダルガチの掌印権と職任を中心に」(『東洋史学研究』2013/12)、「明人の目線からみた 16 世紀漠南モンゴル社会の変化」(『モンゴル学』2014/6)、「フビライ期の江南地域における色目人の任官と活躍 -江浙行省地方官部の色目人官員の事例を中心に-」(『中央アジア研究』2014/12)、「大元帝国時期の孛蘭奚(Bularqu)民と元政府の官吏政策」(『中央アジア研究』2015/6)「17-20 世紀蒙元史研究に表れた清知識人の「モンゴル帝国」認識-「元史類編」、「元史新編」、「新元史」を中心に-」(『中国学報』2015/12)などがある。